

漢音の米(ベイ)などについて

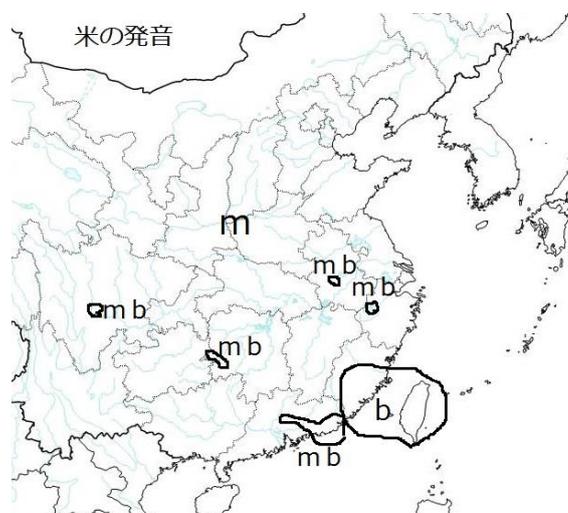
吉池孝一

一

異なる民族が接触したときに何が生まれるかというところから、周辺の民族に移植された漢字の発音を眺めてみたいと考えています。漢字音については 藤堂明保『学研漢和大事典』によります。この字典の最後に付された「中国の文字とことば」という解説も有用なのでこれも参考にします。なお音声記号はふつう[ ]でくるのですが、ここでは裸のローマ字で表記し、簡略な音声とします。

さて、コメを表わす米という漢字の音ですが、古古米(ココマイ)などというときのマイ(mai)があります。これは呉音とされます。米価(ベイカ)などというときのベイ(bei)は漢音とされます。前者の呉音は『学研漢和大事典』の解説によりますと、6世紀以前に流入した中国江南(呉の地)の発音によるものとあり、後者の漢音は遣唐使によってもたらされた長安(現在の陝西省西安市)を中心とする北方の発音によるものとあります。呉音が何者か、なかなか難しいところがありますが、漢音が唐代の長安あたりの音を反映するという点については、それほど異論はないでしょう。そうしますと、漢音の米ベイ(bei)は、唐代長安の発音によったものということになりますが、どのような発音であったのか、ということが問題となります。

そこでいま、米の現代中国音の分布を曹志耘氏主編の『漢語方言地圖集 語音卷』(2008年)によってみますと、つぎのようになります。もっともこれは『漢語方言地圖集』を参照して作った簡略な地図です。



ほぼ全域が m- です。台湾を含めた閩語の地域に b- となる区域があります。b- の左下は閩南語の区域ですが、その区域の潮州から海豊までのひとかたまりに mb- がみられ、内陸にも

幾つか点在しているという状況です。肝心の、かつて長安があった陝西省の西安市の周辺は m-であり、すくなくともこの調査では mb-はありません。

## 二

それでは、漢音のベイ (bei) は、台湾語の bi のような発音によったのでしょうか、それとも、潮州から海豊の mb-のような発音によったのでしょうか。先の方言地図によるかぎり、西安市 (唐代長安に相当) など北方の現代中国語音には mb-や b-はみえないのですが、やや時代をさかのぼった資料には、一定の条件のもとで m-が mb-と発音されたり、n-が nd-と発音されたりすると記された文献があります。

山西省の文水、興県、平陽

Karlgren1915-26

陝西省の安塞、延川、清澗、呉堡、綏徳、米脂

羅常培 1933

重慶市

有坂秀世 1940

これらは陝西省北部の山地および山西省西部などです。先の方言地図では山西省や陝西省は m-となっていますから、比較的短い期間に mb-や nd-などの発音は m-や n-になってしまったのでしょうか。あるいは、調査の質の問題なののでしょうか。この点について、興味深い論文があります。喬全生、余躍龍 2009 です。山西省の文水方言のここ百年程度の音変化について論じたものです。その中より「美」と「拿」という漢字をとりだし、その読みの変遷をみますと次のようになります。

	20 世紀初期	20 世紀中期	20 世紀後期
美 (呉音ミ mi 漢音ビ bi)	mbɛi	me	mei
拿 (呉音ナ na 漢音ダ da)	nda	na	na

使用した 20 世紀初期の資料は先に上げた Karlgren1915-26 の中国語訳本です。20 世紀中期は胡雙宝 1990、20 世紀後期は喬全生氏らが青少年を対象に調査したものとあります。文水でおこったことが、山西省や陝西省全体でもおこっており、それが先の『漢語方言地圖集』に反映しているということであるかもしれません。ひとたび完全に b-となったものが再び m-に戻るというようなことは発音の変化としては考えにくいことですので、唐代長安では mb-, nd-であったものが、その後 m-, n-となったとするのが穏当なところなのでしょう。それに対して台湾など閩語の一部では mb-から完全に鼻音がとれて b-となったというところでしょうか。喬全生、余躍龍 2009 はそのように考えています。もっとも藤堂明保氏は『学研漢和大字典』「中国の文字とことば」(1978 年 1582 頁)において、「福建省は遠く東南沿海の地であるが、当地の文人や官僚が、都ことばのこのくせを伝えたためであろうか、いまなお閩語 (福建語) の文語音は、鼻音を全濁音として発音している。」とします。こちらは日本人のように唐代長安音を借用して定着させたということなのでしょうが、b-となる地域に隣接する潮州から海豊までのひとかたまりの地域に mb-があるとすると、mb-から b-へ発音の変化が起こったとする方が自然なのではないでしょうか。

## 三

上でみたように現在の陝西省西安市（唐代の長安に相当）を中心とする北方の発音に md- や nd- があった。それはおそらく、唐代にもさかのぼるのであり、唐代長安音にかかわる文献資料からもうかがうことができる、というのは諸家の述べるところです。いま、唐代長安音にかかわる文献について、有坂秀世 1940 により、まとめてみると次のようになります。これは吐蕃人による唐代漢字音のチベット文字標記から数例を選び出したものです。

	呉音	漢音	チベット文字
牧	モク m-	ボク b-	' bug
明	ミョウ m-	メイ m-	meŋ
内	ナイ n-	ダイ d-	' dei
寧	ニョウ n-	ネイ n-	ne
南	ナム n-	【ナム n-】 ダム d-	nam

\*チベット文字の ' は鼻音

つぎは、インド人等訳経僧による唐代漢字音の梵字標記から数例を選び出したものです。

	呉音	漢音	梵字
麼	マ m-	バ b-	ba
孟	モウ m-	【マウ m-】 ボウ b-	meŋ
娜	ナ n-	ダ d-	da
曩	ノウ n-	【ナウ n-】 ドウ d-	na

\*【】は有坂秀世 1944 の旧抄本蒙求の漢音により追加したもの

これによりますと、唐代長安音の m- や n- は、mb- や nd- であった。しかし、明寧莽南など、-ŋ -n -m のような鼻音で終わる音では、鼻音の影響を受けて m- n- の形で発音される傾向があった、ということがわかります。それは日本漢字音の漢音にも反映しています。以上は、有坂秀世 1940 および 1944 によりました。

#### 四

これまで、唐代長安の m- や n- が mb- や nd- であったらしいということ、諸家の研究により確認をしたわけですが、真に確認をしたいことは異なる民族が接触したときに何が生まれるかということです。有坂秀世 1940 により、重慶出身者にたいする調査の様子をみますとつぎのようです。米の発音がピと聞こえたので、改めて発音してもらおうと mbi のような音であった。しかし当人は自身の発音の特色に気づいておらず、完全な mi であると主張してゆずらなかつた、と報告をしています。

本人および重慶の人たちが mi のつもりで発音したものが、外国人の耳には bi もしくは mbi と聞こえたということはどういうことかという問題です。重慶の人たちは、米を m- の

つもりで発音し、m-として聞き取るという音についての習慣の型を脳内に蓄えていると考えられます。このような発音と聞き取りにおける習慣の型を有坂秀世氏は音韻観念と称しました。それにたいして、客観的な音を音声とします。音韻が mi で音声が mbi ということになるわけです。

唐代長安の中国人は牧や内を m-や n-のつもりで発音したと考えられますが、その客観的な音すなわち音声は mb-や nd-であった。そこで、遣唐使として派遣された日本人は音声 mb-や nd-のうち、後ろの b-や d-の部分聞き取り、牧ボク (b-) や内ダイ (d-) と認識し、その発音を日本に持ち帰った。これは長安人の発音の意図を誤解した結果にほかなりません。明 m-ŋ や南 n-m などについては、後ろの鼻音-ŋ や-m の影響で、b-や d-よりも m-や n-の部分が良く聞き取れたためメイ (m-) やナム (n-) と認識し、その発音を日本に持ち帰った。これについては、長安人の発音の意図と外国人の理解が運良く一致したということになります。この点は、インド人等の訳経僧たちもほぼ同様であったと考えられます。

いっぽう、チベット人は mb-や nd-を聞き、' b- や ' d-と比較的正確に表記したということになりますが、これもやはり誤解によるものです。

## 五

もっとも、日本語の濁音が古くは鼻音要素をとまっていたという研究もあり、それが遣唐使の時代の日本語にも当てはまるとしたならば<sup>1</sup>、長安音の音声の牧 mb-や内 nd-にボク (b-) やダイ (d-) を当てたのは比較的正確なひきあてであったということになるかもしれません。音声のひきあては正確といえるかもしれませんが、長安人の意図とは異なりますので、やはり誤解と言わざるをえません。

いずれにしても、どういうつもりで発音し聞き取っているかという音韻観念は、異なる民族が接触したときに何が生まれるかを考察するうえで欠かすことのできないものではないでしょうか。

〈参考文献(発行年順)〉

有坂秀世(1940)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」、『音聲學協會會報』第64号。『國語音韻史の研究 増補新版』東京:三省堂、1980:369-374。

有坂秀世(1944)「正倉院御藏舊鈔本蒙求の漢音」『橋本博士還暦記念 國語學論集』東京:岩波書店。『國語音韻史の研究 増補新版』東京:三省堂、1980:609-616。

藤堂明保(1978)『学研漢和大字典』東京:学習研究社。

曹志耘(2008)『漢語方言地圖集 語音卷』北京:商務印書館。

喬全生、余躍龍(2009)「文水方言声母百年来的演变」、『語言研究』2009年第4期、65-69頁

中村雅之(2013)「対音資料研究法叙説—case1:日本書紀α群の音仮名(3)」、『KOTONOHA』125:15-19。

---

<sup>1</sup> 中村雅之 2013 参照。